

2003年度 課題別共同研究会報告

課題別共同研究
人格発達と教育
代表者 高垣 忠一郎(産社)

(1) 研究会活動の特徴

合宿研究会を含めて、5回の研究会を実施した。平均参加者は、12名であり、大学内外における研究内容への関心の高さが伺えた。また本研究会は、参加者が中学高校の教員、児童相談所職員、児童福祉センター診療科の医師、養護施設の職員、スクールカウンセラー、大学院生、大学教員等と多岐にわたり、教育・福祉・医療分野等の学際的な研究・論議がなされてきた点も特徴である。

内容としては、「児童虐待に関わる学校・児童養護施設・児童相談所の取り組み」、「いじめ・不登校問題に対する学校での取り組み」、「現代の思春期女子の捉え方と支援のあり方」などを中心に報告と論議がなされた。また、現代の青年の捉え方をめぐり、宮本みち子『若者が「社会的弱者」に転落する』の文献研究を行ったことも、今年度の特徴の一つである。

(2) 研究会活動で得られた知見 - 児童虐待に関する取り組みを中心に

特に児童相談所が直面する課題をめぐり次のような論議が深まった。身体的な虐待以外の「虐待としつけ」の区別が難しく親との間で水

掛け論になってしまうことが多いこと。この点への診断、アセスメントの難しさがある、児童相談所の一時保護を、保護者が拒否するケースも多く、物的な虐待の証拠が求められるという現実がある、虐待された子どもは、自分に対する「不当な自責感」を持っていることが多く、「あなたは悪くない」と解いていくことが重要である、児童相談所の一時保護の判断は、最終的には所長個人の責任に帰される制度になっている。システムの問題であり、訴訟への対応も含めて早急に検討が必要である、子どもに対してどのような対応が最適かを中心に論ずる必要がある。福祉行政、地域、家庭、学校、児童相談所などが、役割分担をしながらネットワークで支援していく必要がある。同時に児童相談所の中でも、チームを組み合わせながら役割分担をして取り組むという発想が大切になっている。

また、中学校で虐待とADHDの傾向を併せ持つ生徒に対する、スクールカウンセラーも関わった取り組みに関しては、次の点に関して論議が深まった。

父親と教師の関係をつくっていくことの困難性と重要性、

子どもとスクールカウンセラーの別室での居場所づくりの意味と重要性、

子どもに対する学級の仲間たちの関わり方と状況への理解の難しさ、

児童虐待に対する学校としての共通認識の形成と児童相談所への通告や事後対応の意義と難しさ、
父親への支援と子どもへの支援を分けて検討していくことの必要性と具体策、
一連の取り組みの中で、心理職として「子どもの見立て」を行なうスクールカウンセラーの果たす役割の重要性。

さらに、児童養護施設における取り組みの特徴とその意義について次のような論議が行なわれた。

縦割で4つのホームを作り、家族的な雰囲気の中で生活する場の工夫をしている、
ホームごとに月1回は、1時間程度の「家族会議」を開き、困ったこと、やりたいこと、行事等についての話し合いをしている、
特に、「日常生活が学びの場」という視点を大切にながら、ホームごとにまとまって食事を取る。時にはホームでメニューを決めて、自分たちで買い出しに行って食事を作る取り組みも行っている、
職員としては、特に食事、掃除、洗濯を通しての関係を大切にしてきた。職員は大家族の専業主婦とも言える、
子どもの持っている「母なるものへの飢餓感」や「母親喪失の悲しみ」などを職員が共有しながら、悪態を受けとめ母性的なケアをしていくことは重要である、
しかし、依存され抜き差しならない関係になっていく危うさもあり、そのことを分かっている時には職員どうして助けを求めることが必要である。

第1回研究会(2003.5.30)

テーマ： 現代のいじめを考える

- 「小・中・高等学校時代に
いじめられた体験」を大学生に聞く
文献研究 宮本みち子『若者が
「社会的弱者」に転落する』洋泉社

報告者： 春日井 敏之(文学部教授)

前田 瑠美(応用人間科学研究科)

春日井からは、「いじめの公然化」「異質排除」を特徴とする1980年代のいじめと、「いじめの非公然化」「関係性の乏しさ」を特徴とする1990年代のいじめの変化から、現代の子どもたちの関係性がどのような困難を抱えているのかについて報告がなされた。また今日、いじめの背景には虐待や発達障害があるケースも増えていること。文科省調査によれば、いじめは減少傾向にあるが、この状況をどう見ればよいのかなどについて、議論がなされた。

大学生に対するアンケート調査から、いじめの中心は教師の視点から見た文科省調査によれば中学校であるが、むしろ被害者の視点から見た場合は、小学校時代に問題状況が多発しており、その状況を引きずりながら中学校で問題が起こっていることを伺うことができた。小学校における丁寧な取り組みの重要性が指摘された。

前田からは、80年代には「独身貴族」と呼ばれた若者が、バブル経済崩壊後の90年代には「パラサイト・シングル」と呼ばれ、2000年代には「社会的弱者」に転落していると指摘されている社会的・経済的な状況について、文献に即した指摘がされた。

未婚やフリーターの増加は、経済的な困難性や子育ての環境整備の課題だけではなく、現代の若者の親子関係のあり方やアイデンティティ形成の視点からとらえ直し、必要な支援のあり方について検討していくことの重要性が指摘された。

【春日井 敏之（文学部教授）】

第2回研究会（2003.7.26～27）

テーマ： 児童養護施設つばさ園の取り組み
- 日常生活を通しての援助
高校生・睡眠障害のケース
児童相談所における子ども虐待への
取り組み

報告者： 増田 美紀（児童養護施設つばさ園）
今井 千和世（平安女学院高等学校・保健人権センター教諭）
井上 良純（三重県中央児童相談所）

報告 児童養護施設つばさ園の取り組み
- 日常生活を通しての援助
つばさ園では、2歳～18歳までの約60名の子どもたちが共同生活を送っている。虐待がらみで入所してくる子どもも増えている。縦割で4つのホームを作り、家族的な雰囲気の中で生活する場の工夫もしている。ホームごとに月1回は、1時間程度の「家族会議」を開き、困ったこと、やりたいこと、行事等についての話し合いをしている。

特に、「日常生活が学びの場」という視点を大切にしている。具体的には、ホームごとにまとめて食事を取り、時にはホームでメニューを

決めて、自分たちで買い出しに行き食事を作る取り組みも行っている。おやつをある程度認めていくことで、万引きも減ってきた。職員としては、特に食事、掃除、洗濯を通しての関係を大切にしてきた。職員は大家族の専業主婦とも言える。

事例報告を受けた討論の中では、子どもの持っている「母なるものへの飢餓感」や「母親喪失の悲しみ」などを職員が共有しながら、悪態を受け止め母性的なケアをしていくことの重要性が指摘された。しかし、依存され抜き差しならない関係になっていく危うさもあり、そのことを分かっている時には職員どうして助けを求めることの必要性も指摘された。

報告 高校生・睡眠障害のケース
睡眠障害を伴う高校1年の不登校生徒の事例報告と討議が行われた。

公立中学校からの進学であったが、中学校時代にいじめをきっかけに不登校になり昼夜逆転の生活をしていた時期があった。高校に入学してから不登校が続き、定期テストの時や週1～2日は出席をしたこともあったが、その際は前日は徹夜であった。

学校からは、母親に対してカウンセリングをすすめた。母親は子どもを連れて病院へ行き、学校の働きかけもあって睡眠障害の治療のために本人を入院させることになった。

同時に母親のために学内で開催している「親の会」を紹介していった。母親は幼く他者に依存的であり、子どもの状態を受け止めきれない弱さも持っていた。このことは、子どもに対し

て親としてどう対応していくかよりも、自分の親との関係を振り返りながら自身の課題で精一杯の様子に象徴的に現れている。

議論の中では、子どもの入院によって親の逃げ場を作ることの意味、校内の「親の会」に参加する子どもに対して、担任や相談員が携帯電話の番号を伝えて熱心に対応していることの意味と問題点、子どもに対する退院後から、卒業後に向けて受け皿づくりの必要性等について意見が集中した。

報告 児童相談所における

子ども虐待に対する取り組み

児童虐待により、児童相談所が通告を受けて保護措置を取った5件の事例報告と討議が行われた。具体的な事例の紹介は避けるが、報告の中では以下の点が強調され議論となった。

身体的な虐待以外の「虐待としつけ」の区別が難しく親との間で水掛け論になってしまうことが多いこと。この点への診断、アセスメントの難しさがある。児童相談所の一時保護を、保護者が拒否するケースも多く、物的な虐待の証拠が求められるという現実がある。虐待された子どもは、自分に対する「不当な自責感」を持っていることが多く、「あなたは悪くない」と解いていくことが重要である。児童相談所の一時保護の判断は、最終的には所長個人の責任に帰される制度になっている。システムの問題であり、訴訟への対応も含めて早急に検討が必要である。子どもに対してどのような対応が最適かを中心に論ずる必要がある。福祉行政、地域、家庭、学校、児童相談所などが、役割分

担をしながらネットワークで支援していく必要がある。同時に児童相談所の中でも、チームを組みながら役割分担をして取り組むという発想が大切になっている。

【春日井 敏之（文学部教授）】

第3回研究会（2003.11.14）

テーマ：中学校における虐待事例への対応

報告者：小田 裕子

（滋賀県スクールカウンセラー）

小田氏は、大学院修了後、4月から公立中学校のスクールカウンセラーとして勤務されている。しかし、子どもたちは、新米カウンセラーに合わせた「練習問題」から起こしてくれるわけではない。着任していきなりぶつかった、父親からの虐待とADHDの傾向を併せ持つ中学生の事例報告とその検討を行った。

討論の中では、父親と教師の関係をつくっていくことの困難性と重要性、子どもとスクールカウンセラーの別室での居場所づくりの意味と重要性、子どもに対する学級の仲間たちの関わり方と状況への理解の難しさ、児童虐待に対する学校としての共通認識の形成と児童相談所への通告や事後対応の意義と難しさ、父親への支援と子どもへの支援を分けて検討していくことの必要性和具体策、一連の取り組みの中で、心理職として「子どもの見立て」を行うスクールカウンセラーの果たす役割などについて、貴重な意見が出され議論を深めることができた。

【春日井 敏之（文学部教授）】

第4回研究会(2004.1.23)

テーマ: 演じたがる思春期女子についての一考察
報告者: 石黒 真美(応用人間科学研究科)

石黒氏は、東京都の元中学校教員であり、演劇部の顧問や担任として中学生に関わってきた。東京都の教育現場は、教職員への管理が厳しさを増し、教師の抱えるストレスも増加している。その中で、子どもと関わるうえでも、何か新しい「支え・技」が必要になっていると報告された。実際石黒氏は、「アニメおたく、民族衣装コスプレ」と自称しながら、民族衣装を身に付けた社会科授業などユニークな実践報告を重ねてきた。

次に視点を子どもに移し、自分への「支え・技」の一つとして、思春期の子どもが「演じたがる」ことの意味について考察している。自己表現は下手であるけれども、自己表現の意思は強い。しかし、決まった型にはまりたくないと考えている思春期の女子が、演じたがることを、石黒氏は「纏う」と表現した。

議論の中で、「演じたがる」ことに含まれている意味については、次のような意見が出された。

自分探しの一つの方法、一つの逃げ場であり、少し前向きな復習の場、なりたい自分と現実の自分の折り合いをつけていくための一つの場、日常生活では自分の演じられない子どもが、演劇部と顧問という二重の守りの中で演じることで自分を出そうとしている姿、演劇の世界の誰かに思いを託して、自分を語る姿でもある。

議論の後半には、子どもは現実世界の中でも

演じているのかいないのか。現実世界にぶつかり合いや居場所があると、あえて演じなくてもよいのではないかと。したがって、「現実世界の中で自分を出していけるように、大人が援助していくこと」がポイントになるのではないかとという重要な意見が出された。

第5回研究会(2004.3.12)

テーマ: 対応が難しい思春期女子の事例
- 保健室から

報告者: 山下 慶子
(立命館中学・高等学校養護教諭)

<p style="text-align: center;">課題別共同研究 発達相談・発達援助 代表者 荒木 穂積(産社)</p>
--

(1) 研究会活動の内容

本研究会は発達診断の実際を、ケーススタディーを中心に研究するという活動方針をとっている。今年度(2003年度)は、社会就労センターこだま(大津市)の利用者、京田辺市療育教室(京田辺市)の母子、平安女学院幼稚園(高槻市)の園児および本学心理・教育センターのクライアントなどを対象に発達診断を実施し、ケースカンファレンスを行って、発達援助プログラムの開発に取り組んできた。発達援助プログラム作成に向けてのケースカンファレンスは学内(研究会)5回と学外(現場)15回を実施した。今ほかに発達診断実施前後に適宜スタッフミーティングを行っている。

(2) 研究会活動で得られた知見

(応用人間科学研究科)

本研究会がこれまで中心的に取り上げてきた内容は、成人期知的障害(自閉症を含む)の労働・生活場面での発達援助、就学前集団療育場面での発達援助、幼稚園での保育場面での発達援助、プレイセラピー場面での発達援助であった。

3歳児 河野 望(社会学研究科)

成人期知的障害(自閉症を含む)の労働・生活場面での発達援助は、今年度で3年目となり利用者(約30名)全員の発達診断を実施し、現場の指導者を含めた個別発達援助プログラムをまとめることができた。

就学前集団療育場面での発達援助は、一昨年度は療育場面別のプログラム開発を、昨年度は療育の年間プログラム開発をすすめてきたが、今年度はまとめとして園児の個別プログラムの開発をすすめた。

幼稚園での保育場面での発達援助は、集団保育で発達援助の必要な園児の個別発達援助プログラムを開発した。

プレイセラピー場面での発達援助は、2名の自閉症児を対象に発達援助プログラムの開発を行った。

これらの研究成果の一部は、2003年度日本応用心理学会(於:神戸市、流通科学大学)で発表した。

第1回研究会(2003.4.20)

テーマ: 1・2・3歳児の発達診断を学ぶ

報告者: 1歳児 荒井 庸子

(応用人間科学研究科)

2歳児 井上 洋平

第2回研究会(2003.5.25)

テーマ: 乳児の発達診断を学ぶ

- 赤ちゃんの一生 -

姿勢と運動の発達

発達診断の実際

報告者: 乳児前半

北畠 早苗(社会学研究科)

森光 彩(応用人間科学研究科)

乳児後半

梅川 久美子(社会学研究科)

藪 博美(応用人間科学研究科)

乳児期の発達について、前半と後半に分けて発表しました。前半、後半ともに最初は、“赤ちゃんの一生 - 姿勢と運動の発達”のビデオを見ながら、原始反射から、姿勢と移動の変化、交流活動の増加など、4名の乳児を対象にして、発達段階における全般的な発達の特徴を時期を追って見ていきました。次に、“発達診断の実際”のビデオを見ながら、乳児の獲得していく発達と照らし合わせながら、積木、鏡、小鈴などの道具を用いた机上での発達検査から発達相談に至るまでの方法を見ていきました。

それぞれの発表の終了時には、実際に乳幼児検診に携わっている参加者から、より詳しい状況の説明を受け、乳児や発達、及び実際の援助技術に関する知識や関心を深めていくことができました。

【前田 明日香(社会学研究科)】

第3回研究会(2003.6.22)

テーマ： あそびの中にみる4歳児

あそびの中にみる5歳児

あそびの中にみる6歳児

報告者： 前田 明日香(社会学研究科)

森脇 希(応用人間科学研究科)

河野 望(社会学研究科)

「ビデオ・あそびの中にみる4歳児・5歳児・6歳児」(田中昌人・田中杉恵 監修)を見ながら、その解説書をまとめたものを報告しました。そして、あそびの場面でどのようにその発達の基本特徴をあらわし、さらに自発的な活動の中で課題場面以上の自発的、創造的な豊かさを発揮するかを、事例をもとに話し合いました。

【森脇 望(応用人間科学研究科)

第4回研究会(2003.7.27)

テーマ： あそびの中にみる1歳児

あそびの中にみる2歳児

あそびの中にみる3歳児

報告者： 吉田 有希(産業社会学部)

岸本

寒川 はるか(産業社会学部)